



東日本区ユースボランティアリーダーズフォーラム

札幌YMCA ユースボランティア 加野 誠さん

私は9月6日から三日間、東京YMCA 山中湖センターで行われたユースボランティア・リーダーズフォーラムに参加しました。フォーラムでは基調講演を聞き、それを受けてグループでディスカッションをしました。

フォーラムのテーマは「私たちにとってのみつかる。つながる。よくなっていく。」でした。そして、熊本YMCAの伊藤眞太郎さんが登壇し、不登校支援や自己肯定感についてお話してくださいました。

不登校の要因は複数あるのですが「無気力・不安」が多くを占めています。私は人間関係や環境になじめないという理由で、不登校になっている人が多いと思っていました。そのため、不登校の現状について改めて知ることができてよかったです。熊本YMCAでは「ぶらっとほーむ」という居場所づくりを行っています。「ぶらっとほーむ」は子どもたちの「らしさ」を大切にしており、人間関係を築く中で自分たちの居場所を創りだしています。

私は伊藤さんの講演を聞いた中で「子どもたちにとっての心の安全地帯になる」という言葉が特に印象に残りました。この安全地帯は単に場所のことを指しているのではなく、人のことを表しています。どんなに素晴らしい環境（場所）があったとしても、そこで自分らしくいられなければ、そこは居場所とはいえません。しかし、自分らしくいられ、自分も相手も大切にすることができる人間関係があれば、たとえ決まった場所が無くても、その人とのつながりが居場所となります。この話を聞いて、私が普段活動しているアウトドアクラブの活動でも、子どもたちのらしさや個性を大切にしたいと思いました。また、子どもたちに限らず、一緒に活動するユースのリーダーたちにとっても、YMCAが一つの居場所となるようにしたいです。そして、そのために何ができるのかを考え、実行していきたいです。

その他にも伊藤さんは、自己肯定感についても話してくださいました。内閣府が出しているデータによると、日本は他国と比べると自分自身に満足している人が少ないです。これは他者と比較して自分を低く評価していることが関係しています。自己肯定感、レジリエンスという、困難を乗り越え回復する力に必要です。そして、居場所には自己肯定感を高める効果があると言われています。そのため、伊藤さんは長所も短所も含めて「わたしでいいんだ」と思えるような、居場所づくりを行っています。

以上のような講演内容を受けて、ユース世代である私たちは、何ができるのかをグループで話し合いました。私のグループでは、「子ども同士で自己肯定感を高め、自分らしくいられる居場所を創れるように、私たちユース世代がそのきっかけをつくる」という考えに至りました。そして、幼児、小中学校、高校の三つの年代に分けて具体的なきっかけづくりの案を考えました。幼児に関しては子どもの興味関心を伸ばすという案が出ました。子どものやりたいことや好きなことを否定するのではなく、受け入れることが大事であると考えました。また子どもにとって、大人の言葉が与える影響力は非常に大きいと思いました。小中学校に関しては、作品作りといった体験活動をするという案が出ました。この活動を通して、達成感を得られますし、仲間意識が芽生え、子どもたちのつながりが強くなると考えました。高校に関しては、小学生に学校祭に来てもらう、部活動を体験してもらうという案が出ました。小学生にとっては、将来のイメージができます。高校生にとっては新たな自分を発見できます。例えば、教えるのが上手や子どもと関わることが楽しいということを知ることができます。以上の内容を最終日に発表し、フォーラムを終えました。

今回初めてフォーラムに参加したのですが、いつもとは違う環境やメンバーとの活動は刺激的で、よい経験でした。フォーラムに参加することができて本当に良かったです。支援して下さったワイズの皆さまありがとうございました。これからもよろしくお願いいたします。

ウクライナに「公正な平和」を



写真：①キーウの独立広場で戦死者を追悼する家族連れ ②キーウ中心部にある独立広場。手前は戦死者を追悼する小さな国旗 ③親日家の指揮者ミコラ・ジャジューラさん ④「戦うしか選択肢はない」と語る詩人のオスタップ・スリヴィンスキーさん ⑤市民のソフト・パワーについて語るタチアナさん ⑥気鋭の現代アーティスト、ニキータ・カダンさん ⑦キーウ市内の広場に展示されているロシア軍の戦車の残骸と先川さん

ジャーナリスト・先川信一郎さん

(2022年度・2023年度専門学校国際人間学ゲスト講師)

戦争は「文化」を破壊します。それによって人々の心を打ち砕くためです。ウクライナ人が民主化を諦め、ロシアの「属国」になることを受け入れるなら戦争はすぐに終わります。ですが、市民は自分たちのアイデンティティと自由を守るため、侵略者と戦うことを選びました。

ウクライナは青々としたドニプロ川が北から黒海に流れ、首都キーウの旧市街は聖ソフィア大聖堂やベチェールシク修道院がそびえる歴史的な雰囲気のある街です。9世紀から13世紀にこの地に栄えたキーウ公国（キーウ・ルーシ）は、ビザンチン帝国に比肩する栄華を誇りました。その後、モンゴルに征服されましたが、17世紀半ばに自由を尊ぶコサックが国をつくりました。

私が昨年3月から4月にかけて訪れたウクライナは、「戦争が日常」になっていました。平和な街に突然、空襲警報が鳴り響きます。すると、買い物をしている人たちや公園を散歩しているカップル、レストランで食事をしている市民はシェルターに避難します。そんな状況が3年以上続いています。

当時、私は首都キーウの独立広場の前にあるウクライナホテルの12階に滞在していました。ですが空襲警報のたびに地下4階のシェルターに避難していると、精神的に疲労します。夜中もミサイル攻撃で眠れません。でも、そこに住んでいる市民は必死に耐えています。

ある日、キーウ市内を歩いていると美術館に大勢の市民が入っていくのが気になりました。不思議に思って館内のぞくと、ウクライナの著名な画家「アラ・ホルスカ（1929-1979年）展」を開催していました。ホルスカはモザイクや壁画で抵抗の精神を描き、旧ソ連のKGBに殺された悲劇の画家です。

「市民が美術館を訪れるのは、自分たちの日常を取り戻したいから。ロシアの侵略には屈しません。これが私たちのソフト・パワーです」。学芸員のタチアナさんが誇らしげに解説してくれました。

芸術家は時代の前衛であり、その精神を作品に込めます。そこで、ウクライナの現代アートをけん引するニキータ・カダンさん（43）に会うことにしました。彼は芸術文化の最高賞タラス・シェフチェンコ国家賞を受賞しています。

私がカダンさんに注目したのは、ロシア軍が首都に迫る中、地下シェルターに1カ月間こもって避難者のために美術展を開いたからです。芸術によって人々を励まし続けたのです。「戦争と不条理」が彼のテーマで、欧州はもちろん、来日して新潟県の越後妻有アートトリエンナーレにも出品しています。

キーウのアトリエを訪ねると、ギリシア神話の英雄アガメムノンと黒いゴミ袋を描いた不思議な油彩がありました。「何の暗喩ですか？」と聞くと、「アガメムノンは植民地化して支配しようとする王。ゴミ袋は死んだロシア兵を入れる袋」だそうです。

数日後、ウクライナを代表する指揮者、ミコラ・ジャジューラさん（63）にも取材しました。彼は毎年のように国立フィルハーモニー交響楽団を率いて来日しています。「私は音楽で戦う」と、戦時下での覚悟を語ってくれました。私はウクライナ国立歌劇場で彼が指揮するプッチーニのオペラ「トスカ」を鑑賞しましたが、5階までバルコニーがある1300席は満員でした。

一方、西部の都市リヴィウで会った国民的詩人のオスタップ・スリヴィンスキーさん（46）は、「われわれはスターリンによるホロドモール（大飢饉）や大粛正などソ連時代の恐怖を忘れていない。だから戦い続けるしか選択肢がない」と力を込めました。これがウクライナ人の率直な気持ちです。国際法を犯し、核の脅しを続け、侵略を始めたのはロシアです。今年こそは国際的な圧力で「公正な平和」が実現することを願ってやみません。

札幌 英語暗唱大会

例年、札幌YMCAでは、小学生英語クラスの発表の場として「英語暗唱大会」を開催しています。

今年は12月7日（土）に実施しました。

この大会は任意参加のため、参加しない生徒もいましたが、クラス内では12月第1週に全員が発表しました。本番では、クラス内や家庭で熱心に練習してきた成果を発揮し、すばらしい発表が続きました。暗記した文章をジェスチャーを交えて読み上げる姿に、保護者の方も日頃の努力の成果を感じられたのではないのでしょうか。



北見 街頭募金活動

12月14日（土）、北見YMCAに通う小学生有志30名が街頭募金活動を行いました。

「困っている人達を助けよう！」という思いを込めて呼びかけを行い、この日45,119円の募金を頂きました。

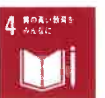
午後からはYMCAに戻りクリスマス祝会として、オーナメント作りやプレゼント交換を行い、世界の平和に思いを寄せました。



とち帯広 幼保園クリスマス発表会

12月21日（土）、音更町共栄コミュニティセンターを会場に幼保園のクリスマス発表会が行われました。4・5歳児のステージは、クリスマスページェント（イエス・キリストの降誕劇）を中心に、クラスのオリジナルコンサートや和太鼓演奏など工夫を凝らした発表となりました。元気いっぱいに「はらぺこあおむし」の劇遊びを披露した3歳児にも観覧席から大きな拍手が送られました。全園児による「We Wish a Merry Christmas」の歌声に、会場もすっかりクリスマスの雰囲気包まれた発表会となりました。

暖かい家の中でクリスマスを祝う時、イエス様が寒い冬の夜に粗末な家畜小屋で生まれたことを思い起こして、災害や紛争など困難な状況の中にある人々の幸せを祈る私たちでありたいと願います。



ワイズ便り

「ハロウィンビールパーティー」北見ワイズメンズクラブ

10月19日(土)に北見YMCAでハロウィンビールパーティーが行われました。通常ではカボチャをくり抜いたランタンを飾ったり、近くの家々を訪れてお菓子をもらったりします。さらに、北見では資金造成を兼ねてビールパーティーを開催しました。保育園の子ども達や父母たちが様々な衣装をして参加。一般の方々もいます。飲食を楽しみながら、子ども達のダンスや歌の発表に声援を送り、仮装コンテスト・ビンゴ大会などで盛り上がるひと時を過ごしました。コロナ禍の終焉を感じさせる一時でした。ワイズメンズクラブは、ビール、焼きそば販売や、ジュースつぎなどのお手伝い。大人から子どもまでが一緒に楽しめるYMCAらしいイベントでした。



INFORMATION

北海道YMCA 創立記念日集会 創立128周年

北海道YMCAは、W・クラーク博士から聖書による教育を受けた札幌農学校の1期生と、1期生の強い影響を受けた2期生による札幌バンド(キリスト教信仰によって強く結びつけられた青年の集団)の青年たちを礎として1897年に結成された札幌基督教青年会によってYMCA運動が始まり、今年128年目を迎えました。4月1日を創立記念日と定め、創立の思いに立ち返ると共に、ミッションステートメントに示された働きを確認し、YMCAの願いを多くの人に伝え、共に学び合う時として創立記念礼拝・講演会を開催します。

日時 2025年4月5日(土) 14:00~17:00
会場 札幌YMCA(札幌市中央区南11条西11丁目2-5)
※zoomによるオンライン参加も可能です。

— 記念講演会 —

テーマ:「パレスチナの人々と命に向き合って」

講師: 猫塚 義夫さん(北海道パレスチナ医療奉仕団団長)

プロフィール: 医師。札幌生まれ。1973年に札幌医科大学卒業後、北海道勤労者医療協会に入職。以後、米国留学を含め脊椎外科と膝関節外科を中心とする整形外科医として診療と臨床研究を進めてきた。同時に学生時代から抱いてきた社会進歩への志を実践した。障害者へのボランティア活動に始まり、「医療9条の会・北海道」幹事長(現、共同代表)となりつつ、2010年に「北海道パレスチナ医療奉仕団」を立ち上げ、現在に至る。

著書: 医師が診たパレスチナとアフガニスタン 平和的生存権の理念と実践(2024年 あげび書房)

平和に生きる権利は国境を超える パレスチナとアフガニスタンにかかわって(2023年 清末愛砂共同執筆 あげび書房)



<申込用QRコード>

寄付及び会費の納入・募金へのご協力に感謝申し上げます。(2024年12月~入金者・敬称略)

○維持会費: 石澤伸弘 粥川道子 繁富香織

○国際協力募金: 石澤伸弘 北見重建 佐々木未来 東海林聖 杉本拓 千葉頭 掘功 山中恵理子 吉田亜希

○チミケップキャンプ場開設60周年記念募金: 石澤伸弘 ○ウクライナ支援募金: 札幌バプテスト教会